

幼稚園での経験に関する 3 歳児と母親の会話(2)

— 会話に対する母親の信念の検討 —

○野口 隆子

(お茶の水女子大学大学院)

小松孝至

(大阪教育大学)

《問題と目的》幼児期において、母親などと共同で自らの経験や行為を語ることは、自己を捉えなおし、自己を語ることを身につけていく社会文化的な実践として考えられている(Miller, 1994)。

一連発表の(1)においては、「子どもの自己の構成」の場として、母子が実際に行った会話を対象とし、その内容から会話を持つ機能を考察した。

しかし、会話を日常的な実践として考えるならば、母親が子どもとの語りの場をどのように捉えたうえで実践しているのか、という点について検討する必要がある。

そこで本研究では、母親にインタビューを実施し、会話に対する母親の信念を明かにするとともに会話の内容との関連性について検討する。

《方法》調査協力者：都内の私立幼稚園 3 歳児クラスに通園する園児 (M=6, F=1, 入園時 3 歳 1 ヶ月～3 歳 10 ヶ月) の母親。

調査方法：会話の録音調査に参加した母親に対し、調査当日にインタビューを行った。入園から調査日まで子どもや自分自身(母親)の様子について、調査者がいくつかのテーマを織り込みつつ自由に語ってもらっている。本研究ではその中の「子どもの友だち関係」および、「子どもの園生活をどのように知るか」の 2 テーマを中心に検討する。

なお、基本的に時間制限を設けずにインタビューを行ったため、インタビュー時間は約 30 分～1 時間 30 分であった。

《結果》インタビューから、母親が子どもの家庭での行動特徴を園での様子と積極的に結び付けているという表現が見られた。これは一連発表(1)で述べた会話の特徴、すなわち「連続した存在としての子どもへの着目」と結びついていると考えられる。会話全般に対する信念として、以下の 2 点が抽出された。

a. 子どもの経験や対人関係を知りたいという欲求

母親のうち 5 名は、この会話を通して子どもの行動や対人関係を知りたい(あるいは現在はまだそれができない)ということに言及していた。つまり会話を通して子どもを知ろうとする動機は日頃から強いものと考えられる。

理由として触れられたのは、園での社会的な関係についての心配や、その関係を維持するための子どもからの情報収集(事例 1)等であった。

(事例 1)... 自分の子が相手の子になんかやっていたりとかして、それでなんかその子が親に話してだれだれちゃんからやられたとか、心配じゃないですか、なんか親同士の関わりもあるから、だからすこし耳にいれておきたいな、一言すいませんでしたとか、あやまっておきたい...

今回の調査が、「園生活を知る手段」をテーマとしていたことから、上記の側面が強調された可能性はある。しかし、小松(2000)による質問紙調査でも「情報収集」への着目が 3 歳児クラスの母親で高いという結果がみられており、母親の会話への積極的な参加を支える動機として重要であると指摘できる。

b. 「子どもの世界」の尊重 上で述べた欲求と逆に、子どもが持つ独自の経験を尊重したいとする意識や、子どもが話したくないことについて問うことを躊躇する気持ちが語られている(事例 2)。

(事例 2) あんまり細かく知り過ぎちゃってもいけないようなところがあるような気がするんですね。(中略) 幼稚園にはいったときからお兄ちゃんも私から離れて、自分だけの時間っていったらおかしいんですけど、自分の関係の世界がやっどできるわけじゃないですか、それに親が、なんていったらいいのかな、あまり関わり過ぎたり、その子の世界をつぶすような感じがしちゃうんですね。(中略) せつかくやっどお友だちも自分の力で作ったお友達ですし、自分の先生だし、自分の幼稚園だっっていつてるんで、ある程度自分のなかでやってもらおうかなって。

これに類似する信念は、他の母親 2 名のインタビューにおいてもみられた。子どもが独自の経験を持つという認識は、「個」としての子ども像をより際立たせ、その経験を自らの意思で語る語り手として子どもを位置付ける、重要な“自己観”であると考えられる。

同時に、この信念は a で述べた子どもの世界を知りたいという欲求と対置され、母親にとって葛藤的側面を持つ可能性もあるといえよう。